

戦争責任、アイデンティティと国際関係

国際言語文化学科 ファイファー・マティアス (PFEIFER Matthias)

●連絡先 E-Mail : pfeifer39@u-shizuoka-ken.ac.jp

キーワード

戦争責任, 文化とアイデンティティ, 集合的記憶,
日本人論

90年代後半以降、日本では第二次世界大戦についての議論が次第に白熱しはじめ、戦争は大衆文化(映画、マンガ等)でもよく取り上げられるテーマとなった。ドイツでは60年以上にわたるいわゆる「過去の克服」に、「ホロコーストのモニュメント」の完成によってとりあえず終止符が打たれたが、日本のほうは議論の終わりがまだ見えない。グローバル化の中で世界における自分の位置を探している日本と日本人のアイデンティティーが、過去と密接につながっている問題であることは、特にバブル崩壊後にメディアで取り上げられている戦争責任論でよく表わされている。日本と似た歴史を持つドイツと比較して、その戦争責任論の相違点と共通点を明らかにし、ドイツの成功と失敗から日本が何を学べるかが、研究のアピールポイントである。

第二次世界大戦(または太平洋戦争、15年戦争)の大衆化は最近の現象ではない。実は50年代から様々なジャンル(映画、文学)で戦争体験は取り上げられていた。70年代から80年代にかけて戦記マンガのブームも見られる。90年代から、大衆向けの戦争映画や小説がベストセラーになった。戦争を描写する漫画は過去と現在、日本とアジアとの関係などのテーマは、以前よりも日本社会で注目の的となった。それは元々人気のあるジャンルである「日本人論」の延長であると言える。そういう映画、マンガの中で日本人であることはどう描写されているか、その内容が観衆や読者のアイデンティティ形成にどう影響しているかが、本研究の目的である。

アピール ポイント

「ドイツ語圏(ドイツ・スイス・オーストリア)を中心に、ヨーロッパの文化・社会・歴史への理解を深めるための、文化交流ほか各種交流を行う組織等の支援ができる。相談、講演、翻訳・(逐次)通訳(ドイツ語、日本語、英語)、分野別の要綱作成など。」